

文章は経国の大業なり

塩田 光喜

●我が師・司馬遷

「文章は経国の大業なり」とは魏の文帝曹丕の言葉である。

曹操、曹丕、曹植の曹父子三人は中国歴代の帝王の中でも、とりわけ詩を好くしたことで有名な一家である。彼らは『三国演義』中の人物であるから、日本でもなじみの人物であるが、主役級の魏武帝曹操を除けば、その息子達の事績は余り知られていない。

曹丕は詩においては父曹操に一籌を輸し、弟の曹植の足元にも及ばないが、『典論』によって文芸評論というジャンルを拓いたことで中国文学史上に大いなる足跡を残した。冒頭の言葉はその『典論』に収められている有名な言葉である。

私と曹父子の出会いには小学校四年生の時、故郷高松の書店の本棚で『三国志』を手にとった時に遡る。御多分に漏れず、私は中国大陸を舞台とする大口マンに魅了さ

れてしまったのである。

ただ、私が他の三国志読者と異なっていたのは、三国志オタクにならなかったことだ。

私は諸葛亮（今に至るまで我がヒーローである）が自らを管仲になぞらえたという文を読み、諸葛亮が自らをなぞらえる程の管仲とは何者だろうと思った。

管仲の事績が『史記』という書物に記されていると知った私は、県立図書館（うちから歩いて五分の所にあつた）に足を運び、探し当てた。

漢文で書かれていた『史記』の解説が始まった。

すると、漢字の列の中からは、『三国演義』よりも更にドラマティックで透徹した人間劇が眼前に開けてきたのだ。

小学生の知性と感性、とりわけ想像力をバカにしてはいけない。私は解説文にも助けられて『史記』全巻を読み通したのである。

学校で教わったことはあらかた忘れてしまったが、『史記』の名文の数々は今でも折に触れ、脳裏に蘇る。

たとえば、「李將軍列伝」末尾の一文。「太史公曰く、伝に曰く、其の身正しければ、令せずして行われ、其の身正しからざれば、令すと雖も従わず、と。其れ李將軍の謂いなり」諺に曰く、桃李言わざれど、下自ら蹊を為す、と。この言小なりと雖も、以て大に喩うべし」。

太史公とは『史記』において、著者司馬遷が自らを指す時に用いる彼の官名である。

中島敦の『李陵』を読んだことのある読者なら、「李將軍列伝」の主人公李広の孫である李陵が匈奴戦に敗れて降り、匈奴の地朔北に連行されたとき、ただ一人李陵を弁護し、漢の武帝の逆鱗に触れ、宮刑に処せられ宦官となり、『史記』完成のため、太史公とし

て恥を忍んで生きながらえたことを知ってしよう。なお、この時、武帝は「陵の母妻子を族し」ている。一族皆殺しにしたのである（参考文献①）。

李広もまた、匈奴との決戦を果たせず、大将の衛青の吏僚の詰問を受け、部下に向かって「而るに大將軍、また広の部（隊）を徒して回遠を行き（遠回りをさせ）、しかもまた迷いて道を失う。豈に天にあらずや（天命と言わずして何と言おうか）、且つ、広、年六〇余なり。ついにまた刀筆の吏（文書作成の木っ端役人）に対すること能わず」と言い放つと、「ついに刀を引きて自ら刎はぬ（自分で自分の首をはねた）」。

この非運の名將と自らの運命を重ねて、司馬遷は「桃李もの言わざれど、下自らこみちを為す」（桃やすも（李は李広にかけている）はものを言わないが、その花の下は、慕う人たちに自然と踏まれて小道ができる）と万感の敬愛の辞を送ったのである。

あるいは「淮陰侯列伝」。

淮陰侯とは漢の高祖の天下一統の業に最も功績の大きかった、戦闘指揮の天才、韓信を指す。

漢王劉邦と楚王項羽が中原に鹿を逐って、対決を繰り返していた

時、漢王の武將として別働隊を率いて項羽が立てた六国を征討に向かった韓信は趙国を下した後、大國斉（今日の山東省）の七〇城を抜いて支配下に収める。

パワーバランスが漢に大きく傾いたことに驚いた楚王項羽は使者を韓信に送り、斉王として自立して漢楚斉で三分立するよう勧め

る。そこに現れたのが謀士蒯通であ

彼は項羽の言に従って斉王として自立し、三国鼎立せよと三寸の舌を尽くして説得する。曰く「けだし聞く、天与うるに取らざれば、反つてその殃を受く、と」。また説いて曰く「野獸すでに尽きて猶狗亨らる」（野獸がいなくなると猶犬は煮殺されるのですぞ）と。

しかし、韓信は煮え切らない。しかし、韓信は煮え切らない。「後数日、蒯通、また来て曰く。知は決の断なり。疑は事の害なり。（知とは決断することであり、遅疑逡巡することは物事を害することでありませう）」。

そして、こう締め括る。「それは功は成り難くして敗れ易く、時は得難くして失い易きなり。時に時うこと、再び来らず」。

だが天才将軍、韓信には権力の論理と心理と力学がわからない。

「いや、わしには漢王に恩義がある。漢王もわしの事は悪く遇するまいよ」などと甘い事を言つて、「遂に蒯通を謝す（ついに蒯通の策を用いなかつた）」。

漢の中国統一の後、韓信は項羽の本拠地、楚に移封され楚王となるが、韓信の軍事的才能を恐れた漢の高祖劉邦は謀臣陳平の謀事を

用いて楚に巡遊し、詐つて韓信を召して捕縛した。だが、高祖はさすがに功績第一の韓信を誅殺することはできず、位を淮陰侯に落として、帝都長安に居住させた。

韓信は「日夜怨望し、居常鞅鞅として」楽しまない。

そして、やはり高祖の武將陳希と図つて反乱を策す。陳希が反旗を翻し、高祖が自ら追討に赴いた隙に、長安でクーデターを起こそうとしたのである。

しかし、それを高祖の後、呂后に密告され、「呂后、武士をして（韓）信を縛せしめ、これを長樂の鐘室（長樂宮の一室）に斬る」。

「信、まさに斬られんとして曰く、吾、悔ゆらくは蒯通の計を用いざりしことを。すなわち兒女子の詐わる所となる。あに、天に非ざらんや（悔いても悔い切れぬのは蒯通の計を用いなかつたこと

だ。おかげで女子供にたばかられ

る羽目になったわ。天命と言わずして何と言おう）」（参考文献②）。小学六年生の私は雄勁にして躍動感あふれる司馬遷の文体とともに、彼の人間を冷徹に別扱してゆく非情のリアリズムにシビレたのである。

そして、その時、私は司馬遷の文体とともに、彼の人間を、人間社会を、そしてその歴史を見る眼を譲り受けたのだと思う。

●ニューギニア高地の司馬遷

私はその後、幾何学の明証性と「無限」の神秘に魅かれて、数学少年になり、大学は理科系の学部に進む。

だが、四国から東京へ出てきた田舎者の私は、そこでレヴィーストロースの『野生の思考』という書物に出会い、私の大好きな人間と幾何学精神の美しい結合に驚嘆し、魅せられたのである。

そして、専攻を文化人類学とし、英語で書かれた民族誌を読み漁ることになる。

こうして、私の知的遍歴は杖を文化人類学を立てて、一応の結縁灌頂を受けることとなったのである。

アジア経済研究所のペーパーニューギニア担当に採用された私

は二〇代最後の二年間をニューギニア高地のインボン族のもとで暮らし、石器時代から文明へ突入する現場に遭遇するという類い稀れな幸運に恵まれる。

だが、実は私はインボン族の民の劇的変容（メタモルフォーゼ）を欧米の人類学者の眼ではなく、太史公司馬遷の眼で見ていたのである。

こうして、私は二年半のフィールドワークの体験を、西洋流の民族誌ではなく、ニューギニア高地の『史記』として『石斧と十字架―パプアニューギニア・インボン年代記』という形で結実させることとなったのである（参考文献③）。

西洋の人類学者の誰も成し得なかつた、司馬遷の眼でニューギニア高地を見るという唯一無二の知的経験ができたのは、一にかかつて、小学校時代に一心不乱に読んだ『史記』のおかげである。

●言葉の湧き出る泉

私の言いたいのはこういうことだ。

私が小学生の時に英語でシェークスピア全集を読み、その名句が口をついて出るほどに親しんでいたなら、私は今頃、英語で著作や

論文を書いていただろうということである。

だが、私が読んだのは漢文で、司馬遷の『史記』だった。それは、取り替えることのできない一回限りの体験である。人は人格形成期の少年時代を二度生きることはいきないのである。私は、それをとても有り難いことだとも思っている。私が今、こうして、塩田インボング曼荼羅を紡ぎ上げつつあるのも、司馬遷先生に私淑したおかげだと思っている（もともと、中学に入って、マルクスやトルストイ、バルザックやスタンダールやフローベールそしてポーと出遭うことになるのだが）。

日本では、少なくとも江戸時代の武士階級は漢文で知的精神的自己形成を行った。その系譜は明治以降も脈々と受け継がれ、日本の近代文学や近代思想形成の母胎となった。

私は鷗外や中島敦に我が精神的血族を見いだす。

彼らの文体そして人間と人間社会とその歴史を見る眼は明らかに少年時の漢文教育を通じて獲得されたものであることが同じ経験をした私にはよくわかる。

ドイツ語を巧みに操ったと言われる鷗外も彼の小説はドイツ語で

はなく、漢文を礎^{いしづ}えとする日本語で書かざるを得なかった。それは、彼の最高最深い思索は日本語でしか言い表し得なかったからだ。『高瀬舟』や『阿部一族』に脈打つ情操は日本語以外の何語で語り得たというのか。

最近読んだ、近代日本の生んだ最高の数学者、岡潔との対談において、小林秀雄は文章の秘法を語っているで紹介しておこう。

「私みたいに文士になりますと、大変ひどいんです。ひどいということは、考えるというより言葉を探していると言ったほうがいいのです。ある言葉がヒョッと浮かぶでしょう。そうすると言葉には力がありまして、それがまた言葉を生み出します。（略）ヒョッと言葉が出てきて、その言葉が子供を生み出します。そうすると文章になっていく。（略）それくらい言葉というものは文士には親しいのですね。」（参考文献④）

ここには、人間と言葉に関する非常に深遠な真実（透察）が語られている。おそらく、日本の古代から脈々と流れている言霊^{ことだま}観が語られているのだ。「ヒョッと言葉が出てきて、その言葉が子供を生み出します。そうすると文章になっていく。」近代日本の言葉遣いの

達人の一人である小林秀雄は自分の文章生成の秘密をそう語り明かしているのである。そのためには、文士は言葉に親しくなくてはならない。

問題は、それによって精神的自己形成を行った母国語以外の外国語が「言葉が子供を生む」ほどに「親しい」ものになり得るかということだ。それができるのなら、外国語で書くことも大いに結構だろう。

●創造的知の構築のために

二〇世紀最大の経済学者、シュンペーターによれば、全ての革新は異質なエレメントの新結合から生じる。

たとえばマルクスの『資本論』はヘーゲルの弁証法をアダム・スミスに始まる古典派経済学に合体させるといって、イギリスの経済学者の夢寐にも想い描けなかった知的荒業^{あらかわ}によって、空前絶後の *total de force* となったのである。

私のささやかな経験も、太史公の言葉を用いれば「小なりといえども、以（つ）て大に喩うべし」と言えるのかもしれない。そしてこれこそが、東洋に生を享けた人間が、西洋出来^{しゅつた}の学問に取り組み意義なのではあるまいか。

それゆえ、「世界に向けて発信するためには英語で書かねばならない」というのは本末転倒の議論だと思ふのだ。

少なくとも、私は網野善彦の『無縁・公界・楽』以後の日本の人文・社会科学書に「世界発信」に値する業績を見いだすことはできない。

ニーチエの『ツアラトウストラかく語りき』と双壁^{そうへき}を成す一九世紀最大の思想書『資本論』をカール・マルクスはドイツ語で書いた。その時、マルクスはロンドンに亡命してまもなく二〇年を迎えようとしていたのである。

（しおた みつき／アジア経済研究所貧困削減・社会開発研究グループ）

《参考文献》

- ① 司馬遷『全吉田賢抗訓』二〇〇四
- ② 『史記』「李將軍列伝」明治書院。
- ③ 『史記』「淮陰侯列伝」明治書院。
- ④ 塩田光喜「二〇〇六」『石斧と十字架―パプアニューギニア・インボング年代記』彩流社。
- ⑤ 岡潔・小林秀雄「二〇一〇」『人間の建設』新潮社 一二三―一三〇頁。